

- 【写真】1 毎年春に開かれる『カリコボーズの山菜まつり』。建物は再現された「作小屋」
 2 姉妹都市 熊本県菊池市から借用している甲冑（レプリカ）[菊池記念館]
 3 元気に働く「お母さん」たち
 4 日本の『原風景』を思わせる佇まい

特集

「協働」と「連携」によるまちづくり①6
 宮崎県西米良村の交流人口拡大事業

生涯現役の村民が 「平成の桃源郷」づくりに挑戦



「西米良型ワーキングホリデー」で知られる宮崎県西米良村だが、最近、新たな交流人口の拡大施策で注目されている。高齢化率70%を超える集落で、地産地消の農家レストランや宿泊施設を整備し、地域住民全体で運営して成果を上げている「小川作小屋村」事業を紹介する。

宮崎県の西都市中心部から車で約1時間、一ツ瀬川に沿った国道219号を熊本県方向に分け入っていくと、急に視界が開け、西米良村の小川という地区に出る。典型的な日本の集落の風景だが、その中で、城郭風の建物がひととき目立っている。旧米良城主の居城跡を中心に、茅葺きのレストランや歴史民俗資料館、民話館、宿泊施設などが建ち並んでおり、かつての村の中心地だったところだ。ここが平均72歳のおばちゃんたちを中心に、住民全員が施設を運

村の将来人口が 約750人になるという危機感

営して、全国の注目を集めている西米良村の『平成の桃源郷 おがわ作小屋村』である。

西米良村は役場のある村所という集落のほか、この小川地区を含めた8つの集落が、一ツ瀬川の本流・支流の山あい点に点在している。現在の人口は約1,200人、高齢化率は約42%の村となっている。

西米良村の歴史は古い。南北朝の時代に、北朝の圧迫を受けた肥後国菊池氏の子孫が日向国の山の中に落ち延び、米良姓に変えて、その一帯を領した。以降、江戸末期



西米良村情報

【人口】1,202人（平成28年1月31日現在）

【面積】271.51km²

【発電所データ】

（株）九州電力 榎之口・村所水力発電所、宮崎県企業局 田代八重水力発電所

【本特集問合せ先】

おがわ作小屋村 ☎0983-37-1240 西米良村役場 ☎0983-36-1111

まで、焼畑農耕で約370年間、今に残っている数々の民話とともに、純朴な暮らしを営んできた。ところが、明治維新で大きな転機を迎える。版籍奉還に際し、最後の領主であつた菊池則忠公（維新後菊池姓に戻す）が、領地のすべてを領民に分け与え、以降、農業で生計を立ててきた。

かつては全国有数の木炭の生産地として知られていたが、林業の衰退とともに村の人口は激減していき、昭和20年代には約7,000人いた人口も、平成6年頃の推計で「平成22年には約750人になる」という将来予測が出るほど厳しい状況になった。



最近では全国から観光客が訪れている

「作小屋村構想」という 新たな交流人口増加策

西米良村がその名を全国に知られるようになったのは、平成10年から始まった「西米良型ワーキングホリデー制度」や「8つの庄」という、それぞれにテーマ性と物

語性を持たせた村づくりなどであった。都市との交流を促進するこれらの事業で成果を収め、黒木定藏村長は観光庁が認定する「観光力リスマ」となった。

ワーキングホリデー制度に続き、「8つの庄づくり」の一環として立ち上げた第3セクターの「株式会社米良の庄」は、村が整備した温泉施設と宿泊施設を運営し、村の交流人口は平成6年頃の約4万5,000人から平成14年には約13万5,000人と増加していく。

この頃、新たな振興計画の構想が浮かび上がる。その背景となつたのは、「平成の大合併」問題であった。

一ツ瀬川流域の市町村により合併協議会が立ち上がったが、西米良村の住民は合併反対を表明して「自立」を目指すこととした。そうした村民の「覚悟」を受け、村はさらなる行政改革を行うと同時に、8つの地区の自立に向けた、様々な施策を模索することになった。

その結果、出てきたのが「作小屋村構想」であった。

「作小屋」とは、前述した版籍奉還の時に領民に分配した土地に大きくかわる、西米良村特有の生活様式に由来する。菊池氏が領

民に土地を分配した際、従来の居住地より遠くに土地や山林を分け与えられた者は、そこまでの往復に難儀することになった。そのため、「作小屋」という仮住居を建て、冠婚葬祭などの行事や盆暮れ以外は、その住居を拠点として農作業に従事した。

「作小屋村構想」は、こうした「作小屋」という伝統的な生活様式を地域資源としてとらえ、地元の食材を使用した農家レストランや宿泊施設を整備・運営しようとするものであった。

それに加え、山あいに点在する集落という地勢の中で、訪れる人を心からもてなすという西米良村の人情、さらには数多く残っている古くからの民話などの風土も重要な資源であった。

これらをひとつのストーリーとして、仕立てていくことが計画の基本となったのだ。

最も重要な事業主体については、村内の8つある地区のうち、最も厳しい状況にあった小川地区に白羽の矢が立った。当時、小川地区の人口は約100人、高齢化率は72%で“限界集落”を超えて、“消滅”の危機にあった。行政としては、こ

の地域で事業が成功すれば、他の地域を刺激して村のさらなる活性化の「先駆け」となる、という思惑があった。

また、この小川地区には米良の領主が住む城館をイメージして整備

備した「歴史民俗資料館」があり、平成12年から毎年春に『カリコボーズの山菜まつり』というイベントを地域住民総出で開催しており、地域の結束が固かった。



米良氏の城館をイメージして整備した「歴史民俗資料館」



植樹祭も毎年開催されている

「桃源郷を再現する」という 事業コンセプト

「座して死を待つわけにはいかん」。

平成18年、村から投げられた「作小屋村」構想の説明会で、小川地区の公民館長が発した言葉である。集落の「消滅危機」を前にした住民が示した「覚悟」によって、「作小屋村」は小川地区に決定した。

平成19年から、地区の四役に婦人会長や青年代表などを加えた準備委員会が発足。集落運営に向けた研修や勉強会、ワークショップを重ねて具体的な計画が作られていった。

県の補助金や村費など総事業費は約1億2千万円で、茅葺きの古民家の再現や組織づくりなど、事業開始に関する準備が進められた。

平成21年、地区の全戸が参加する「小川作小屋村運営協議会」を発足させ、施設の運営と指定管理を行うこととなった。施設の敷地面積は3.4km²で、その中に茅葺きのレストランと、多目的に使用される「作小屋」と呼ばれる小さな住家、「歴史民俗資料館」、そこに隣接した宿泊施設が配されている。

コンセプトは「平成の桃源郷」。中国・晋の詩人陶淵明の作品『桃花源記』から採ったものだ。「山道に迷った漁夫が、桃花が咲く林

にたどり着き、さらに進むと、そこには小さな村があった。その村では人情の深い人々が平和に暮らしていた」という内容の物語を小川地区で現代に再現しよう、というものである。

平成21年10月、グランドオープンを迎える。その少し前、黒木定藏村長から連絡があった。東京で小皿に小分けした料理を見て、それを参考にしたいと、レストランで提供するメニューの盛り付けについての提案があった。それが『おがわ四季御膳』（写真右）である。このメニューを1日10食の限定で出すことにした。

その頃、宮崎県では「限界集落」を「いきいき集落」と呼び、地域活性化策を推進していたが、小川地区はその第1号に認定された。グランドオープンでは、その様子をマスコミがニュースで取り上げ、以降、この「おがわ作小屋村」目当てに観光客が押し寄せて来るようになる。「1日10食限定」であった『四季御膳』が1日に1000〜1300食の注文が出るようになり、文字通り「目の回る忙しさ」となったのだ。



郷土料理が並ぶ『おがわ四季御膳』

それに加えて、宮崎交通がその年の『記紀編纂1300年』を記念したツアーバスを走らせたことにより、ますます交流人口は増加していった。今では、東京や鹿児島、鹿島の旅行会社が旅程の中に、この「おがわ作小屋村」を組み込むツアーを商品として販売している。

作小屋村では平成21年のグランドオープンから毎年、施設とその周囲に植栽を始めており、桃、桜、レンギョウ、アジサイ、モミジなど約4,000本の花が咲き始めている。これは福島県福島市にある『花見山公園』にヒントを得た。まさに、「平成の桃源郷」を目指そうという地域住民の心意気であった。

また、この村に住む人々がTV番組『人生の楽園』で紹介されると、さらに観光客が訪れるようになった。平成22年の「口蹄疫騒動」で一時的に集客は落ち込んだが、今では年間2万〜2万5,000人が訪れている。

右は上米良みな子さん(59歳)。左は中武ひさよさん(67歳)



茅葺きのレストラン



大きな囲炉裏のあるレストラン内部

高齢化率が高いことは 決してマイナスではない

昨年度の売り上げは2,400万円。そのうち、地域へ還元したのは1,800万円となる。

常駐のスタッフは事務局長と男性1人、女性1人の3人。ともに30歳前後の若い職員だ。彼らは社会保険等の身分保障を受けている。

主にレストランで料理を提供する地区の「お母さん」たちは、4人のチーフのもと交代で勤務して

おり、その平均年齢は72歳。

レストランの売りは「昔ながらの味」だが、「わたしたちがやりやにやいかん」と、毎月変更されるメニューの構成も若いスタッフとともに考えている。パートなので、孫に小遣いを与えることができるくらい給料だが、以前に比べて生活に張りが出てきたと、「お母さん」たちは言う。



「温泉施設ゆた〜と」



木造平屋のコテージ風宿泊施設「桃源郷の宿」。
全12棟ありキッチンも完備している



小川作小屋村 運営協議会 会長
上米良 秀俊 さん



小川作小屋村 運営協議会 事務局長
上米良 省吾 さん

「彼女たちが口紅をさして嬉々として働いていることがとても嬉しい。高齢化率が高いということは、決してマイナスに考えることではない。長生きする元気な年寄りが多いということは素晴らしいことです」と運営協議会長の上米良秀俊さん（63歳）は語る。

この事業の展開を境に、小川地区の人口は平成21年から、子供2人を含めて16人増加した。消防団も24→39歳の平均30歳と、村で最も若く一番元気がある。

事務局長の上米良省吾さん（29歳）は小川地区の出身で平成22年にUターンした。「このままでは帰ってくる場所がなくなる」と思っていたところに「小川作小屋村事業」がスタートしたため、Uターンを決意した。若いスタッフ2人もUターン組である。

現在の人口は60世帯93人。高齢化率は62%に下がった。近く子供が生まれる予定で、そうなると60%を下回る。

「おがわ作小屋村」の今後の課題は、やはり新しい人材の確保。後継者の育成が急務となっている。

地域づくり国土交通大臣賞を受賞

上米良事務局長は言う。
「私の使命は、村を出ていった若い人が帰って来やすい環境をつくることです」
村役場のある村所地区から小川

地区への道のりは車で1時間近くかかっているが、現在建設中のトンネルが完成すると約15分に短縮され、繁忙期に不足する従業員の確保もしやすくなる。



西米良村 むら創生課 総括補佐
牧 幸洋 さん

この事業の最終的な目的は、交流人口の増加から定住人口の増加を目指すものだ。西米良村が挑戦してきた各種事業の成果は数字にも表れている。20年前の予想を良い意味で裏切り、その人口は約1,200人に踏みとどまっており、合計特殊出生率も2.2と全国平均を大幅に上回っている。

村に8つの集落があることは前述したが、「おがわ作小屋村」の事業は他の集落にも大きな影響を与えていると、むら創生課の総括補佐である牧幸洋さんは言う。

「各地域の住民が、持続可能な地域づくりを考えるようになってきました」

西米良村の全職員70人は、全員がそれぞれ8つの地区を担当している。地域住民の相談対応や各種行事などを支援しているが、「おがわ作小屋村」の事業のあと、各地域の住民に「我々にも何かできるのではないか」という意識が芽生えてきたのを感じるという。今では、鹿やイノシシの肉を活用した「ジビエの加工品」づくりや、地区の春祭り・夏祭りなどのイベントの充実、「川の駅」の運営など、住民の意識が「私たちだってできる」と目に見えて変化してきた。

事実、昼食で訪れた「川の駅・百菜屋」で「お母さん」に、その料理の評価を熱心に聞かれた。訪れた人からの評価を次に活かすのだという。

村は「幸福度の高いむらづくり」を目指している。

「村を訪れた人から『よいところだ』と褒めてもらえることが、村民にとって大きな自信につながっています。今は村を誇りに思う

という人が増えていきます」と牧さんは胸を張った。

この「おがわ作小屋村」の取り組みで、小川作小屋村運営協議会は「平成25年度地域づくり表彰 国土交通大臣賞」を受賞した。

村民が元気で楽しく暮らせないようなところでは、交流人口はおろか、定住人口の増加などはおぼつかない。西米良村の取り組みは、そうした地域活性化のヒントを示しているように思える。

ジビエの加工品



「川の駅・百菜屋」